

京極論文へのコメント

## 「環境→集団→個」という順序で、 授業UD研究をマネジメントする

桂 聖

日野市立日野第三小学校（以下、日野三小）は、授業のユニバーサルデザイン（以下、授業UD）研究における先進校として、日本全国に名を馳せている小学校である。毎年のように行われていた研究発表会では、500～600名の教師が全国各地から集まってくる。ほぼ毎月行われていた校内研修会も公開していて、全国の学校関係者による視察は後を絶たない。

授業UDとは、特別な支援が必要な子を含めて、すべての子が楽しく学び合い「わかる・できる」授業づくりである。日野三小の授業では、正に、この授業UDによる子どもの姿が現れてきている。日野三小の子どもの姿に感動しているからこそ、多くの教師が学んでいるのである。

さて、この日野三小の学校経営や校内研修をマネジメントしてきたリーダーこそが、本論文の筆者である京極澄子氏である。氏は、平成19年度から平成26年度まで、日野三小の校長を努めてきた。日野三小の子どもの姿は、正にリーダーシップを発揮してきた成果である。

本論文によると、京極氏による授業UD研究を核にしたマネジメントは、三つの期に分けて考えられている。第1期は「子どもを包み込む環境の整備」、第2期は「授業UD化」、第3期は「個に特化した指導の工夫」である。

京極氏も指摘しているが、従来の特別支援教育の視点だけで授業を考えていくと、「個」への指導に偏ることが多い。だが、そもそも他の「個」も困っていることも多く、「個」の指導だけでは

学校全体は変わらない。そこで第1期では、その発想を転換して「個を取り巻く環境」から特別支援教育の充実を図ってきている。

また、環境を変えるだけでは、子どもたちが授業で「わかった!」「できた!」という充実感を味わっているとは言えない。そこで第2期では、「授業における集団指導」の改善に着手している。

その上で第3期では、通常学級の授業で困っている「個」に目を向けて、通級による指導を中心に、個に特化した指導を工夫している。

つまり、「環境の整備→集団指導の改善→個別指導の工夫」というで、授業UD研究をマネジメントしてきているのである。小貫悟氏による「包み込むモデル」で言えば、内側の中心に位置づく個から発想するだけではなく、「個を想定した上で、外側から個を取り巻く環境の整備や集団指導の改善を図り、それでも難しい場合には個に特化した指導をする」という「個を想定した上で、外側から改善していく」ことが大切なのである。

京極氏が本論文において整理した「三つの期による授業UD研究のマネジメント」は、理論の有効性を実践的に検討したものとして評価できる。本論文は、授業UD研究によって「学校、教師、子ども」を変えようとするリーダーのマネジメントの筋道を示したものとして価値ある論文だと言える。

桂 聖（かつら さとし）  
日本授業UD学会理事長、筑波大学附属小学校教諭